

主観主義にはしり重大な失敗を犯すのである。また今までの生活環境、教育により意図的に植えつけられた多くの人は、そのことに対して自分の疑念をいだかず、またその間違いを指摘しても自分の考えに固執しあらためようとしない。このことは彼等はいろいろな面でも実践不足であり、実際に自分の体でもって体験していないためである。というのも一般的に言って大衆は抽象的の概念に対しての認識度が低く、実際的なことを自分の体で感じない限りそこから抜け出すことはできない。しかしその反面、権力側のプロパガンダによって、赤は悪いとか、米軍がいなくなったら中国が侵略してくる等の多くの観念的なことをあたかも現実の事象のごとくに信じ込み、いろいろな事象を提示しても考えもなかなかわるまいといふように権力に対する最終的の信頼感が存在している。このように権力によって現在の生活が保証されているといった幻想性があり、しかも我々によって自分ら独自の利益を保障されている。この最終的のものは、また社会の根本的の矛盾が現実的に鋭く露頭してきている。いふならば革命情況ではない、現在、最終的の判断をせよという場合我々よりも権力側を信じるということである。この場合後述するが現段階において権力側の幻想性を粉砕しえないからである。この場合必要なのは、大衆に多くの実践活動に参加させ、権力の幻想性を体でもって感じさせることである。このことは我々が権力以上の信頼性を獲得しなければならぬことを意味する。具体的には、身近な問題を積極的にとりあげ我々と共通の利益で結ばれているのだという考えを徹底的にやらねばならない。しかし前述したように、我々は彼等がその斗争という実践をへる中で彼等の変化を客観的にみまわめ、その度合に応じ、さらに斗争を深化させるような問題提起を行い、またその斗争の過程の中で加えらるる権力側の干渉、弾圧を通

じて権力の本質の全面暴露を行っていかねばならない。つまり個別から普遍課題へと問題を深化させ、あるいは権力に対する不信感を増大させない限り大衆の日常性打破は行えないのである。また大衆の斗争からの逃避をおさめるあまり、これらのこともおこたりに獲得物のみに力をそそぐならば、かき獲得物が不満足だといふのではなく、斗争戦線も合法的に保証したり、物質的保証を得ることも当然必要だが、そのために根本的問題において妥協してはならない。それは追従主義であり、そこから新しい賞をもつた斗争は生まれぬし、権力からえさを奪えらぬれば、権力に対する幻想性が残っている限り彼等は再び元の大衆へと還元されていってしまうのである。

(2) いかにして大衆の革命的エネルギー

を引きだすか

この項目を説明するにあたり、身近な問題として、あの大学史上まれにみる一大衆斗争であったところの日大斗争について考えてみたいと思う。事の発端は20億円の使途不明金問題である。これに対して多くの新聞は一斉に非難の論調をかかげた。多くの学友もやはりこのことに対してすくなくからず反発した。しかし5月にはいふまでは表面上斗争は発生しなかった。斗争の潜ぶく期である。その向斗いは着実に前進し5月の大爆発が起った。5月、現在不当にも長期にわたり官憲により拘留されている日本大学全学共闘会化議長秋田明大君が経済学部において右翼体育会の物干にわたる暴力支配を実力で突破した時、日大斗争の大飛躍が約束されたのである。9・4において村下隊を粉砕して行く中で9・7、9・12の日の大学史上に前例のない村下隊と一大街頭斗争が勝ちとらされていった。そして9・30大衆団交、10・1佐下発言、10・21四隊反戦デモ、11・22東大斗争支援、11・18、19の神和、学生エラタンと日大斗争の旗でも